特集
途上国とコイン

インドの貨幣はインドの縮図

高倉 嘉男

国によって、貨幣の立場はだいぶ違うとみえる。少なくともインドにおける貨幣の立場は日本とは異なる。だが、インド人よりも貨幣を大事に扱っているかどうか、その判断は難しい。唯一いえるのは、庶民生活を送る限りインドは小額通貨がないと困る国であり、結果的に貨幣が重要な役割を担っているということだ。

現在インドでは、紙幣は主に五ルピー、一〇ルピー、二〇ルピー、五〇ルピー、一〇〇ルピー、五〇〇ルピー、一〇〇〇ルピーの七種類が、貨幣は一ルピー、二ルピー、五ルピー、一〇ルピーの四種類が流通している。二〇一三年現在の相場は一ルピーが一・七円ほどである。現地の物価に照らし合わせると、五〇ルピー以下の紙幣・貨幣を小額通貨と呼ぶことができる。インドでは、貨幣を含めたこの小額通貨の立場が日本とだいぶ違うのである。

まず日本の状況を見てみよう。日本で何も考えずに現金で買い物をしていると、財布に貨幣が貯まって仕方ない。特定の貨幣がないと困る場面は日本ではほとんどなく、大抵どこでもお釣りがもらえる。財布のなかの貨幣が気になるのはバスに乗るときくらいだ。Suicaなどの電子マネーの普及により、貨幣はますます役割を失いつつある。貨幣の価値は当然その金額分でしかない。日本の社会では通貨は完全に「大は小を兼ねる」ので、わざわざ重たく「小」の貨幣をたくさん持つ必要はない。財布に貨幣が貯まり過ぎると、なるべくそれらを使って財布を軽くしようとする。いわば日本では貨幣は邪魔者である。

インドではそんなことはない。日本と違ってインドの商店などでは小額通貨が慢性的に不足しており、金額の一の位を貨幣で切りよく支払うことをよく要求される。手持ちの貨幣がないとこちらの責任となり、お釣りを全額支払ってもらえなかったり、お釣りができるまで待たされたり、ひとつ一ルピーのキャンデーをお釣り分だけ手渡されたりする。インドでは貨幣の常備は日常生活の常識だ。使う場面も多いため、財布に貨幣が貯まることは少ない。偶然貨幣がたくさん集まるとニンマリしてしまうし、貨幣が底を突くとやたら不安になる。なまじっか大きなお金よりも、小さなお金がなくて困る方が多いインドでは、貨幣は単に数字上の価値しか持たない一兵卒ではなく、経済のなかで個別の役割を与えられた特殊部隊なのだ。

しかし、他方でインド人は貨幣に対して極度に現実的なところもある。記念通貨の扱いにそれが如実に表れている。日本では、お釣りのなかに記念通貨が混じることはほとんどない。「ギザ十」ぐらいが精一杯だ。それは、記念通貨が特別扱いされているからだろう。だが、インドでは記念通貨が一般の通貨と同様に使用されている。貨幣は貨幣という訳だ。だから、日常生活を送っているだけで記念貨幣集めができてしまう。これに気付くと、毎日の買い物が格段に楽しくなる。何を隠そう、筆者もかなりの数のインド記念貨幣を保有している。全て日常の買い物で入手したものだ。ただ、一度でも流通してしまった貨幣はコレクター市場での価値が激減するため、額面以上の財産にはならないだろう。

記念貨幣の一般流通に加え、インドでは貨幣のデザインや規格が頻繁に変更されるため、自動販売機の普及は事実上不可能な状態だ。特に金属の価格が上がってからは、貨幣を溶解させて売却する違法行為を防ぐために、各貨幣の金属価値を額面以下にしなければならなくなり、数度に渡って貨幣の改定が行われた。結果、同じ額

筆者撮影

面の貨幣が複数流通している。これだけ貨幣に統一性がなくてよく経済が回るな、と感心するほどだ。

それらの現状を踏まえると、インドにおける貨幣の立場は、正に途上国のそれだといえる。だが、インドは古くから文明が栄えた土地であり、貨幣の使用も紀元前六世紀まで遡ることだけはインドの名誉のために強調しておかなければならないだろう。古代から中世にかけて時の支配者たちは、支配権の確立、経済活性化、戦勝記念など、様々な理由から様々な貨幣を発行して来た。インドの考古学博物館には必ずと言っていいほど貨幣学のコーナーが設けられ、近隣地域から出土した各時代の貨幣が展示されている。その一方で庶民の間では、宝貝を貨幣代わりに使用する習慣も二〇世紀まで続いていた。これをヒンディー語ではカウリーと呼び、英単語のcowryの語源となった。世界の宝貝貨幣全一三〇種の内、四〇種がインドのものだとされる。インドは「宝貝貨幣経済」の先進国だった。

それでも、インドで機械による貨幣製造が始まったのは一八三五年で、欧州よりも二世紀遅い。しかもそれを導入したのはイギリス東インド会社だ。インドの近代貨幣史はこのときから始まった。

現在インドには四つの造幣局がある。インド最古の造幣局はカルカッタ（現コールカーター）とボンベイ（現ムンバイー）にあり、共に一八二九年に設立。現在でも造幣している。ハイダラーバード造幣局はニザーム藩王国によって一九〇三年に設立され、一九五〇年に独立インド政府に接収された。一九八六年にはデリー近くにノイダ造幣局も設立された。インドの貨幣にはミントマークと呼ばれる印があり、それを見ればその貨幣がどこの造幣局で製造されたものなのか分かる。◆印はムンバイー、★印はハイダラーバード、無印はコールカーター、●印はノイダである。他に、独立前にはラホール（現在はパキスタン領）やマドラス（現チェンナイ）にも造幣局があり、独立後には韓国、イギリス、カナダ、メキシコなどに外注されたインドの貨幣もある。

独立インドの貨幣の表側には一貫して国章であるアショーカ王石柱四面獅子柱頭が刻まれている。一九八一年からは国章の下にサンスクリット語のフレーズ「सत्यमेव जयते」（真実は常に勝利する）が書かれている。また、最近の貨幣には、二〇一〇年に制定されたルピーマーク（₹）が刻印されている。現在は全ての貨幣が円形だが、独立後だけをみても、四角形、六角形、一一角形、花形など、イレギュラーな形の貨幣があった。

インドの貨幣単位は、現在はほぼルピーのみが使用されていて分かりやすいが、歴史的にはその下にアーナー、パイサー、パーイー、その上にモハル（アシュラフィー）といった複数の単位があった。しかもこれらは十進法に基づく互換関係になっておらず、複雑な体系となっていた。例えば四パイサーが一アーナー、一六アーナーが一ルピーである。よって計算は非常に難しい。かつては六四パイサーが一ルピーであったが、一九五七年からは一〇〇パイサーが一ルピーに変わったように、互換関係が変わったこともある。しかし、ルピーとパイサー以外の貨幣単位は今では慣用句のなかに残るのみとなっている。パイサーにしても、今では五〇パイサー貨幣のみが公的に使用を認められており、その下の単位のパイサー貨幣は最近相次いで流通停止となった。それは近年の急速な物価上昇と無関係ではない。五〇パイサー貨幣も最近は市場で全く見掛けなくなった。パイサーが完全に過去の遺物となるのも、もはや時間の問題であろう。

インドは貨幣が優遇されている国かどうか、これだけ論じた後も依然として判断は難しい。だが、その多様性、存在意義、そして時代性から、インドの縮図のひとつと評価してもよさそうである。

（たかくら　よしお／豊橋中央高等学校副校長）